

「落語」の魅力を知る

扇子と手拭いだけで何役も演じる職人芸で、ストーリーも魅力たっぷりの「落語」は、もっとも気軽に楽しめる伝統芸能です。落語には、江戸の暮らしを知る、思い切り笑う、粋を感じる、演じ分けの芸を堪能するなど、落語にはさまざまな魅力が詰まっています。

江戸時代の庶民の娯楽

話の終わりに気のきいた「落ち（オチ）」がつけられることから、落語はもともと「落とし噺」と呼ばれていました。江戸時代の半ば、落とし噺を有料で聞かせる噺家が江戸や大坂、京といった大都市に現れ、庶民の娯楽として盛んになっていきました。落とし噺が落語と呼ばれるようになったのは、明治時代になってからのことです。



マクラとオチがお約束

一人の演者が座布団に座り、身振り手振りとともに滑稽噺や人情噺などを語って聞かせる演芸が、落語です。落語は、「マクラ」と呼ばれる世間話や本編と関連する小咄（こばなし）から始まります。演者はマクラを話すなかで観客の反応を探り、その日の演目を決めて本題に入ります。本題の最後はオチで締めくくることが、基本的な構成です。

2つの小道具が大活躍

たった一人で座ったままで何役も演じる落語では、小道具が大変重要な役割を果たします。落語の小道具といえば、扇子と手ぬぐいですが、それぞれがさまざまな小道具に見立てて使われるのが特徴です。

扇子は箸やキセル、筆、釣竿、包丁などに、手ぬぐいは手紙や本、財布、煙草入れ、札入れなどに見立てられます。芸が立つ落語家が2つの小道具を手に仕草をすると、不思議なことに別の何かに見えてくるのです。



「大看板」を目指して日々修行

落語家には、「前座見習い」、「前座」、「二ツ目」、「真打ち」という階級があります。寄席の番組で一番最初に高座に座るのが前座、二番目が二ツ目、最後が真打ちです。二ツ目を約10年つとめると真打ちになり、真打ちになると弟子を取ることができるようになります。落語家として最終の階級は真打ちですが、真打ち昇進後も、寄席で大トリをつとめる人気落語家「大看板」を目指し修行は続きます。

「古典落語」鑑賞するならまずはコレ

落語の演目 ～古典落語と新作落語

落語の演目は、江戸時代中期から明治にかけて作られた「古典落語」と、大正時代以降に作られた「新作（創作）落語」に大きく分けられます。

古典落語の多くは、江戸の街を舞台に長屋や商家など庶民の暮らしを描いた噺で、わかりやすいオチのある「滑稽噺」とハートフルな物語の「人情噺」があります。

演者である落語家自身が創作した作品が多い新作落語の設定は、現代や未来、異次元、過去の時代などなんでもあります。

オチはぜひ自分の耳で確かめてみてください。

長屋にさまざまな職業の町民が登場する『小言幸兵衛（こごとこうべえ）』

滑稽噺

長屋の家主・幸兵衛は、家を借りにくる豆腐屋や仕立屋に、女房と離縁しろ誰々を嫁にもらえ婿に出せと小言ばかり言っています。妄想を膨らませて自分が作った話で腹を立て、仕立屋を追い返した幸兵衛のもとに乱暴な言葉でまくし立てる男が現れますが…。

親子の情を軽快に語る人情噺の大ネタ『子別れ（こわかれ）』

人情噺

酒と女に溺れ妻子と別れた熊五郎は、三年後のある日に子の亀と元妻のお光が貧しい暮らしをしていることを知ります。亀とお光は熊五郎と再会し、亀の言葉をきっかけによりを戻すことを決心します。「子は謎（かすがい）」という夫婦の言葉を聞いた亀は…。

落語こばなし

上方落語と江戸落語

江戸で生まれた落語を「江戸落語」、大阪で生まれた落語を「上方落語」と呼びます。江戸落語がお座敷芸として発展したのと対比的に、上方落語は長く屋外で演じられていました。

両者の大きな違いは、使う言葉や演出です。江戸落語は江戸弁で、上方落語は関西弁で演じられます。上方落語はもともと道端で大道芸として演じられていたので、観客の気を引くために「ハメモノ」と呼ばれる楽器演奏が入ります。同じ演目であっても上方落語はより笑いに徹し、江戸落語は粋や人情を重視するなど、地域性の違いは演出にも現れます。上方落語には真打ちや二ツ目といった階級がないことも、両者の違いのひとつです。

